

『コルナイ・ヤーノシュ自伝』

著者前書き

自伝を書き上げて、何度も自問した。いったい、何の為に書くのだろうか。何が記憶を呼び起こそうとしているのか。誰にこの書き物を読ませようとしているのか。

人付き合いが良いほうではないし、どちらかと言えば内に籠もる方で、自分の人生についてほとんど語ったことはない。知人の記者が体制転換の真っ只中に、私の辿って来た途について長時間のインタビューをしたいと提案してきた。時が経てば誰もそんなことに興味がなくなるから、と説得した。それから 15 年の歳月が経過した。それでも遅くないことを祈りたい。

事あるたびに、妻は自伝を書くように勧めた。ほとんど毎年、この課題を聞いて過ごしてきた。漸く、書き始めようという気持ちになった。2003 年の半ばからすべての力と時間をこのために集中してきた。だから、後回しできない仕事以外は、すべて先延ばしにしてきた。

妻がこれほど私の自伝に拘ること自体が、十分に大きなインセンティブになった。この書物を捧げる読者がいるとすれば、そしてまた書物の内容に満足してもらいたい読者がいるとすれば、それは妻のジュジャである。

私の子供や孫、他の家族の仲間、友人、新旧の同僚たち、教え子、そして私の論文や書物の読者など、これまで私の人生と関わりのあった人々が、私の自伝に興味を抱いてくれるものと期待している。この仲間の輪はけっして小さくない。私の講義を聴いたり書物を読んだりしたことのある人々が、本書を一冊手にしていただければ、出版社も満足することだろう。

個人的な関係や仕事を通して私と関わってきた人々は、私についての印象を持っていよう。そのそれぞれの主観的なイメージに加えて、もう一つ（これも同じく主観的な）私が描いた自分自身のイメージを加えていただきたい。私の書物に寄せられた批評は数百に上る。本書では、自分の評価にもとづいて、それらの批評に応えたい。それぞれの著作が出来上がった時に、私自身が自分の著作をどう見ていたか、そして回顧録を書いている今、それをどう評価しているかを述べてみたい。これまで各種批評に一切、返答してこなかった。批判的見解に出会っても、論争に持ち込むことは稀だった。しかし、今回は、一度だけ例外として、自分自身の作品にたいして、回顧録の枠内で「批評」を加えてみたい。

自伝は時間経過に沿って進んでいくが、もちろん出来事の順序は時間的厳密さを保っていない。日記ではないのだから。それぞれの章は一つのテーマにまとめてあり、人生の始まりの出来事であったり、仕事であったり、人生の一場面であったりする。章のタイトルには、関係する歳月を記した。章を辿って行けば分かるように、それぞれの対象歳月は順に進むようになっているが、テーマによっては重なり合うところもある。

本書を手にする読者の中には、私の書き物を読んだことがない、あるいは私と出会ったことはないが、しかし私が生きた時代がどのようなものであったかに関心のある人もいるだろう。前もって断っておけば、私はこれらの人々を落胆させたくない。ラーコシ時代、1956年ハンガリー革命あるいはカーダール体制を知りたい人は、それらにかんする豊富な文献に当たる必要がある。本書はこれらの歴史問題を紐解こうとするものではない。だから、それらの研究のためにどんな資料に当たるべきかという情報を、私が読者に与えることはできない。私はこれらの時代を生きて来たが、その主役を演じたわけではない。これらの時代について私が披露できる、また披露したいことは、私自身の人生に関連して生じた事柄だけである。語り見せることができるのは、私の人生の諸事件が展開した社会的歴史的場面である。

東欧、共産主義体制とその崩壊、東欧知識人の迷路と彷徨、経済学研究の道程、その他の包括的なテーマに関心がある人々にとって、本書の巻末付録が「補足的」な価値を持つだろう。これから研究の道に進もうとしている人々には、さまざまな証言が不可欠な資料になるだろう。それらは時代を生き抜いてきた人々の人生と経験についての率直な告白なのだから。すでに多くの人が証言してきた。私も本書によって、その証人の列に加わりたい。実際問題として、学問的な厳密性で仕上げた初期の作品も、私自身の証言だと考えている。すでに消滅した時代の情報でもあるからだ。書き上げた当時は、もちろん可能な限り、客観的であることに努めた。しかし、本書では主観的な評価でこれを補足したい。『不足』や『社会主義体制』の二つの著書では、個人的な判断や断言することが憚れた見解が抜け落ちていた。本書ではその落ちこぼれたものを拾い上げたい。自伝という書物は、倫理・政治・学問に関連する普遍的な諸問題について、個人的なドクトリンの披露を可能にする。テーマが限定された学問的研究では、このような一般的な見解や信念を含めることはできないからだ。

本書のタイトルをどうすべきか、何度も考えた。初めは、「理解する…」としたかった。何よりもまず、自分自身を理解しようとしたからだ。何時、何を考え、何故、何が思考と行動に影響を与え、何から自分が変わってきたのかを説明したい。私の見解に同意した人と同意しなかった人、私の側に立った人と私と対峙した人、そのそれぞれを理解したい。

ハンガリー語のみならず、他の言語でも、「理解」という言葉には、ある種の倫理的な同意、あるいは最低限の免罪の響きがある。いろいろな音声でこの言葉を発してみると、「理解し（分かり）ました」という言葉が持つ免罪的響きを感じるだろう。しかし、これは私の意図するところではない。免罪も自信過剰も、私の立場からはほど遠い。これまで研究成果を発表する際には、研究対象を理解することに努めた。本書でもその姿勢は変わらない。人を動かしたり、諸対立の明示的原因や暗黙的原因を惹き起こしたりするような諸行動の動因、思考の陥穽、深く隠れた諸力を解き明かすことは非常に難しい。自分の過去を検討する課題も簡単ではなかったが、他人のそれを分析することはもっと難しかった。

最終的に、別のタイトルを選んだ。それが「思索の力を得て」だ。この言葉が私の回顧

録の最重要なメッセージの一つを、もっともうまく要約していると思う。私はこれまで、権力を望んだことも、富を望んだこともない。事件の成り行きに何がしかの力を発揮できたことがあれば、それは高い地位から部下に命令できたからでも、またお金を払って協力関係を買収できたからでもない。私が誰かに何らかの影響を与えたことがあるとしたら、それは言葉で発せられたか、あるいは印刷されたかした私の思索によって獲得されたものだ。

本書の草稿を読んだ一人は疑問を呈した。「議論や説得や思想が影響を与えると考えるのはナイーブすぎる。歴史的事件の真の動因は、利害関心だ」。社会変動を観察する専門家や分析家がそうであるように、私も幻想を抱いていない。だから、種々の因果的効果を適切に扱うことに気を配った。いつの時代でも、権力と富の所有者は、可能な代替策を選択する行動人間である。多くの要因が彼らを動かしているだろう。その要因の中で、価値観や理想、思想が占める位置は小さいとは思われない。さらに、権力も富も持たない多数の人々が何を考え、何を信じているかも、事象の展開に影響を及ぼすだろう。もし思想に何の力もないとすれば、私の生涯の仕事は意味を失ってしまう。

もちろん、この力は限界にぶつかる。だからこそ、まさにここに回顧録の主要なテーマがあるのだ。何時どのようにして思考が崩れ去り、そして再びどのようにして再生されるのか、他人の思考が私にどのような影響を与えるのか、どうして私の思考・分析・提案が他の人のそれと対立するのか。思想は常に検証に晒されている。本書のすべての章はその検証の繰り返しであり、その成功と失敗の報告でもある。

サブタイトルとして、本書を「型破りの自伝」と名づけた。本書は二つの特徴において、通常のメモワールと異なっているからである。人生の諸事件を語る時に、時として立ち止まり、それぞれのエピソードに纏わる私の思考を表現している。このような場合、事件を語ることに第一義的な意味があるのではなく、その状況や問題を分析することに意味がある。このような議論の仕方は、社会科学、倫理学、研究・創造過程、科学心理学などのテーマにかかわる諸問題と結びついており、いわば「ミニ・エッセイ集」のようなものだ。だから、本書をメモワールとエッセイ集が合体したものと看做すことができよう。

ほとんどの回顧録は著者の私生活を扱っている。もちろん、私の自伝も、個人的で主観的な視点からの報告であるが、基本的には知的生活の自伝を書いたつもりである。その意味するところは幅広く解釈されて良い。人生の政治的・公的・その他の社会的特質や、知的生活習慣に関係する友人やその他の人間関係を含んでいる。親戚や家族の事件についても、いろいろな箇所で触れている。この部分では多くの幸福や不幸を扱っているが、現実生活で占めていたウェイトに比例するほど多くの紙幅をとっていない。本書で公開された写真は、言葉で表現されなかった人生部分を垣間見る役割をもっているだろう。本書は、狭義の意味での私的問題をほとんど扱っていない。その意味でも、「型破り」と言えると思う。本書の末尾になって、私がどこに境界線を引こうとしたかが明らかになるだろう。

本書の「作品」と「スタイル」について、付言しておかなければならない。50年にわた

る時間の分析を行ったわけだが、私が理解したことを論じることで、追跡可能で普遍化できる思考に仕上げることに努めた。俄作家になるつもりはない。私の叙述から、素晴らしい背景描写、生き生きとした会話、知人の外形描写、何か緊張が走った瞬間の場を感じさせる手法などを期待してはならない。中途半端な作家がそれをやれば、読者には悪い読後感しか残らないだろう。それなら、慣れた手法で、慣れた用語とスタイルでやった方が良いと判断した。作家は、意図的に、問題を未解決のままにしておくか、不透明にしておく。思考を「漂わせる」のだ。それは良い。しかし、学問研究ではこうは行かない。メモワールを書く時でも、私は研究者であり続けている。スタイル、構成、概念化では、不明瞭さを避けることに努めている。

これまでの叙述では、読者対象を決めるのは簡単だった。読者が分かっていたら、何を説明し、何を前提できるかは明瞭だった。しかし、今回は勝手に違った。経済学者や他の専門研究者、年配者と若者、ハンガリー人と外国人、「東の人々」と「西の人々」が、本書を手にするものと期待している。だから、その誰もが私の記述を理解できるように努めた。まだ私の著作を読んだことのない人には、この自伝は私の書物や論文の「触り」を与えることになる。他方、すでに読者である人々には、記憶を新たにす手助けになる。私の叙述が細部に冗長だと感じられる読者には、前もってお詫びし、理解を願う次第である。この点について、さらに説明が必要な読者もいると思う。

自明なように、本書の叙述の源泉は自分自身の記憶である。これ以外に依拠しないように努めた。もちろん、記憶テストをしようと考えたわけではなく、記憶を新たにしようとした。とはいえ、自らの思想や思考だけでなく、実際に起きた諸事件や公開された情報も取り上げた。この事実関係については、可能な限り、慎重に取り扱ったつもりだが、それでもなお、不正確な情報が残っているかもしれない。それらについては、最初の改訂版で訂正させていただきたい。

多種類の資料が利用できた。既述したように、本書ではもっとも重要だと考える研究*に立ち戻っている。いったん印刷されてしまった作品を、何度も読み返すことはしない。今回はこれらを順に再読し、それらに寄せられた批評と反響を読み返した。

* どのような研究を重視しているかは、目次から読み取ることができる。研究の詳細を扱っている章では、サブタイトルとして、対象とした書物の書名を使っている。

私は日記を付けたことがない。けれども、研究を職業にするようになってからは、研究過程で多くのメモを作成し、種々の文書類として整理している。これらの書類は一瞥できるように数百のファイルに、カテゴリーに分けて保管されている。私宛に送られた手紙や、私が書いた手紙のコピーもかなりの部分を占めている。今少し、この多岐にわたる書類に目を配ってみたい。

私自身の収集文書庫を補足するのは、公文書館の資料だ。同僚と一緒に検索したのだが、

非常に興味深い資料に出会った。とくに気持ちが高ぶったのは、当時の秘密警察の資料を閲覧した時だった。ハンガリーの新しい法律によって、国民は自分に関係する資料を手にすることができるようになった。諜報部員の報告、政治的な訴追のために準備された警察の捜査資料、国家保安局係官のメモを読むことは、憂鬱でもありショッキングでもあった。本書では私に係わる政治警察と諜報機関の文書を公開した。

読者を威嚇するつもりは毛頭ない。本書が私の記憶だけでなく、数多くの文書の調査にも依存していることを、読者に予め断っておきたいのだ。本書で扱っている資料調査はたんにそれを周知することが目的でなく、記憶の加工という意味を持っている。いわば長期の精神的彷徨に焦点を当てたもので、光と影、興奮と落胆の諸事件が継起する報告書である。読者が本書を読み進めるにしたがい、私が生きた時代や私の仕事、そして私の人生をより良く理解されることを期待している。

本書の読解を助ける付録と注について説明しておく。巻末には参考文献が付されている。これは本書で触れた出版物をリスト化したもので、本書に関連する包括的なビブリオグラフィではない。ハンガリー語で出版されたものは、ハンガリー語のビブリオ・データになっている。版を重ねた書物の場合は、最新のものを掲示したが、括弧で初版の出版年を記した。

本書には二種類の注釈を付した。一つは頁の下に付した脚注で、もう一つは巻末にまとめた補注である。脚注にはアステリスクが、補注には通し番号を付した。

二種類の注釈を付すのは一般的ではないが、読者の便宜を考えてこのようにした。本書は文学作品でも、学問的な著作でもなく、いわばその「中間作品」である。その性格から、このような注の取り扱いをおこなった。

脚注に置かれた文言は、本文に組み込まれてしかるべきものだが、それぞれが本文の思考の流れから外れた事柄になるので、このような処理を行っている。したがって、そこには視覚的な事例やデータ、エピソード、アネクドートやジョークなどが披露されている。本文を読まれる読者は、是非、脚注も読んでいただきたい。

巻末の補注はいわば研究者が「注釈の仕掛け」と名付けている情報を含んでいる。これまで強調してきたように、本書は幅広い資料収集に基礎づけられている。それが公文書である場合には、慣習に従った公文書パラメータを付している。

文献注のうち、出版されているものは、参考文献のところにビブリオ・データが掲載されている。本文からどの文献に関連するものかが明瞭な場合には、その文献に関する情報を簡単に見つけることができるだろう。しかし、もし本文だけからどの文献に関係するか自明でない場合には、補注が助けになる。補注から関連文献の参照頁が分かるようになっている。

読者の多くは情報源について、一々詮索しないだろうと思う。だから、読み易いように、

情報源に関する補注を巻末に置いた。もちろん、これを参照するまでもなく、本書を読み進めることができる。

他方、本書で扱った諸問題の研究者がそれぞれの問題をさらに追跡したい場合には、必要なすべての情報を補注から得ることができる。

本書の叙述を助けてくれた皆に、感謝したい。同僚のサボー・カタリンは細心の注意を払って、仕事の組織化や文書化を掌握し、何版かにわたる草稿を管理してくれた。歴史家のモルナール・ヤーノシュと経済学博士課程大学院生のイヴァーン・ガーボルは、データと文書の収集、文献と情報の確認、草稿の整理で協力してくれた。

本書の構想や一部の読解を通してコメントしてくれた友人たち、公文書の収集を手伝ってくれた人々、書籍や論文の入手に骨を折ってくれた方々、専門的な問題の明瞭化で助けてくれた専門家、さまざまな形で本書の完成を手伝ってくれた人たちに、感謝したい。多く助力を受けた人々を以下に列挙して、感謝の意を表す。

Csankovski Kata, Karen Eggleston, Erdős Hédi, Fazekas Ica, Jerry Green, Gyurgyák János, Karinthz Márton, Kende Péter, Kenedi János, Kovács Mária, Laki Mihály, Lócsei Pál, Majtényi László, Brian McLean, Négyes Judit, Parti Julia, Richard Quandt, Rainer M. János, Révész Sándor, Gérard Roland, Henry Rosovsky, Sarnyai Éva, Schönner Ágnes, Simonovits András, Susan Suleiman, Sz. Kovács Éva, Varga László.

ここには明示しなかったが、一つ一つの質問に答えたり、一つ一つの情報を確かめたりして、本書の叙述を助けてくれた人々にも、感謝したい。

本書にかかわる研究費用は、OTKA（ハンガリー科学研究基金）の補助を利用した（研究番号：T046976）。ハンガリー科学アカデミー附属経済研究所は、OTKA 補助金の管理業務を引き受けてくれた。

過去 15 年の仕事にたいして、また本書の叙述にたいして、コレギウム・ブダペストは素晴らしい研究環境と支援を伴った職場を提供してくれた。

これまで多くの編集者と一緒に仕事をしてきたが、ガーボル・ルツァのように理解力があり、建設的かつ注意深い編集者と出会ったのは初めてである。キュルネイ・アニコーは本書の装丁を担当してくれた。彼らとともに、本書の出版に助力してくれた Osiris 出版社の皆さんに、感謝したい。

2005 年 2 月 10 日 ブダペスト

コルナイ・ヤーノシュ